

チャレンジ・ザ・ドリーム

Challenge the Dream

～群馬の明日をひらく～

令和元年8月1日（第77回）放送

当協会は、平成25年度より、FM GUNMAと共同制作番組を毎月1回放送しています。創業・起業の応援をメインテーマとし、群馬発の企業のトップインタビューを中心に構成しています。

【プログラム】

■トップインタビュー

PAZ（パース）グループ

樋口建介 総長

■保証協会からのお知らせ

「シルキー クレイン presents ガールズ創業カフェ in 高崎」
について

■チャレンジ企業紹介コーナー

株式会社そうじの力

◎アナウンサー 奈良のりえ

プロローグ

こんにちは。ご案内役の奈良のりえです。夢への挑戦をテーマに企業トップへのインタビューなどをおよそ1時間にわたって放送している「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今日のトップインタビューは、川場村のほたか病院や高崎市の群馬パース大学などの運営を手がけるパースグループの樋口建介総長、73歳です。パースグループは昭和52年（1977年）に樋口総長が32歳の若さで特別養護老人ホームを開設したのが始まりです。それから40年余りで3つの医療機関と大学、専門学校、それから5つの福祉施設などを抱えるグループに成長しました。次々と新しい分野に進出してきた挑戦の様子を伺っていきます。番組後半は訪問インタビュー。掃除を通じて経営改革と人材育成を支援する高崎市の株式会社そうじの力を紹介します。

トップインタビュー

PAZ（パース）グループ

樋口建介 総長

——パースグループの樋口建介総長にFM GUNMAのスタジオにお越しいただきました。今日はどうぞよろしくお願ひします。

樋口総長：こちらこそよろしくお願ひします。



【収録風景：FM GUNMA スタジオにて】

【特別養護老人ホームの開設】

——パースグループは昭和52年に樋口総長が32歳で川場村に特別養護老人ホームを開設したのが始まりと伺っていますが、それまではどのようなお仕事をされていた

のでしょうか。

樋口総長：高崎にあります設備会社で水道とか冷暖房関係の現場監督をしていました。で、同時に兄の会社を手伝いながら、政治活動も開始しました。政治家になろうという思いがあったものですから。

——それがなぜ特別養護老人ホームを運営することになったんですか。

樋口総長：それがですね、たまたま国会議員の先生から、みなかみ町にあるホテルの会長さんを紹介していただいて、その会長さんから、ぜひ社会のために老人福祉の事業をやりたいという相談を受けたんですね。

——ええ。で、お手伝いをしたわけですか。

樋口総長：そうなんです。事務局っていうんでしょうかね、事務の担当をしてですね、いろいろと当時の厚生省、今の厚生労働省とか、群馬県とか、東奔西走したんですね。

——がしかし、それはまあ事務局としてということ、実際に経営に携わるというか、ご自身がやるというわけではなかったわけですよね？

樋口総長：そうですね、なぜ私がやることになったかという、そのホテルの会長さんはかなりの情熱をお持ちだったのですが、年齢的にはもう80歳近かったんですね。ですから、なかなか地元の方々に理解を得られなくて、せっかく国とか県の補助金も決まったんですけども、周囲の理解を得られないで断念せざるを得なくなったんじゃないですかね。そこで私のほうに責任を取ってよという話になりましたね、で、国とか県からいろいろと頼まれてまして……。

——ええ、まあちょっと言い方が乱暴かもしれないんですが、ご自分がやりたくてスタートしたわけではないという（笑）。

樋口総長：いや、全くそのとおりなんです。ね。

——よくお引き受けになりましたね（笑）。

樋口総長：いや、それはねえ、今もよく思い起こしますが、いかにして自分でそれをやらないで済ませるか、どうしたら逃げられるかって、いろいろと考えました。

——ああ、思いますよね。

樋口総長：思いました。でも、北毛地区である利根・沼

田・吾妻に、特別養護老人ホームは一つもなかったんですね、渋川地区も含めて。特別養護老人ホームができるのが群馬県で4番目だったんですね。ですから、せっかく国にも県にもやっていいって言ってもらったにもかかわらず、やめるのは何事かということでしょうね、おそらく。

——もう、周りに固められてしまった。

樋口総長：そうそう。もうまさに固まって……。

——この地域に必要なんだからと。

樋口総長：そういうことだと思いますね。

——補助金も下りるってお話がありましたね。

樋口総長：そうですね。当時、立ち上げに必要な資金が約3億2,000万円ぐらいなんです。そのうちの半分が国と県の補助金なんです。で、残りの半分が自己資金っていうんですかね、寄付金なんです。金額的に、土台もう無理な話なんです。ですから先ほど申し上げたように、いかにしてやめられるか、逃げられるかということばかり考えました（笑）。

——ご自身で集めたんですか、寄付金を？

樋口総長：そうですね。寄付金を集めましたけれども、借入をしても良かったので、9,800万円借りたんですね。あと残りは寄付金で集めました。

——それがなんと32歳の決断だったそうですね。よくご決断されましたね。

樋口総長：寄付の応援をしていただいたのが、日本聖公会教会です。私もクリスチャンなので、その日本聖公会教会の先生方に大変応援していただきました。草津にハンセン病の方が入居している楽泉園があるんですが、あその敷地の中にはバルナバ館という教会があるんですよ。で、そういったところにもご案内していただいて、説明してですね、ハンセン病の入居者の方々から尊いお金を、5万円とか10万円とか、中には100万円も寄付をしてくれる方もいました。ただ、今でもすごく申し訳ないなと思っているのは、教会に集まっていた方々、50人ぐらいですかね。その中の方が私にお茶を入れてくれたんですよ。私はそのお茶を飲めなかったんですね。まさに偏見ですよ、私自身の。お金だけもらって、お茶を飲まないで帰ってきたんですね。これが後々つながって

ですね、ここまでして大変な思いで寄付していただいたにもかかわらず、やらないってことはおかしなものだろうということで、自分への戒めも相当ありましたし、覚悟を決めました。

——その自責の念が覚悟につながっていった……。

樋口総長：と思いますね、今考えますと。

——決断をさせてくれた。それこそ、その一杯のお茶がなければ、今はないかもしれないということですね。

樋口総長：そうですね。ですからお金をいただいた後、ようやくめどが付いたときに、またあらためて草津楽泉園の方々のところに邪魔して、お礼をしながら「おかげさまで」ということで、感謝の念を表してきたつもりなんですけどね。

——そのときはお茶は召し上がりました（笑）？

樋口総長：もちろん、もう何杯も飲みました。（笑）。

——ああ、そうですか（笑）。

樋口総長：まあ、その成果かどうかわかりませんが、特別養護老人ホーム川場春光園ができたときに、楽泉園の入居者の方々が丹精込めて育てた植物をトラック一台分持ってきて、植木を植えてくださいました。これには感激しましたね。

——それは嬉しいですねえ。さて、少し話が違って恐縮ですが、大変なときってというのは、どうやって挑んでいったり、乗り越えたりするんですか。何かご自身で目標とかを掲げたんですか。

樋口総長：目標よりも、やっぱり自分の生き方として「失敗を認めない」ことかなというような感じがしますね。失敗を認めると、それでジ・エンドですから、いろいろな苦労がありますが、一つ一つを乗り越えることは、必ず成功するんだっていう思いがないと、なかなか大変な時期を乗り越えられませんね。だから、失敗を認めないのが私の信念というんですかね。

——なるほど。それからその当時に何か夢を描いたものがあつたそうですね。

樋口総長：そうなんです。昭和52年4月に老人ホームを開設する前の昭和49年に、こういう老人ホームをつくりたい、病院もつくりたいとか、青少年センターもつくりたいとか、大学もつくりたいというものを描いたんです。

でも、それは何で描いたか、今でもわかりません。

——わからないんですか。

樋口総長：わからない。それはおそらく自分の中の怖さとか、不安だとか、心の動揺を抑えるために、この大風呂敷っていうんでしょうかね、そういうものを描いて「必ずこうなるんだ」ということを自分に言い聞かせたんだと思います。だから、先ほど申し上げたように「失敗を認めない」ということにつながるのかなあ、なんて感じますね。

【病院と専門学校の開設】

——そのようにして特別養護老人ホームを設立したわけなんですけれども、翌年には病院を開設したそうですね。これ、もともと病院もつくる予定だったんですか。

樋口総長：昭和49年の絵には病院って描いてあるんですけども、老人ホームの経営で手いっぱいですから、そこまで考えなかったんですね。なぜ病院をつくることになったかという、特別養護老人ホームの川場春光園の入居者の方が重篤なときを迎えたんです。かかりつけ医の先生と連絡が取れないということで、私の手を握ったまま亡くなったんですね。私が看取ったわけですよ。ところが、問題はその看取りで済まされなくて、24時間以内に死亡診断書を書かなきゃいけないんですね。ところが死亡診断書は、かかりつけ医がいないから書けないんですよ。

——そうですねえ。

樋口総長：最終的には沼田警察に電話いたしまして、監察医が来て、それで事なきを得たということなんです。こういったことがすごく難しく、で、さらにまた追い打ちをかけるように、付き添いの問題が出てくるんですね。

——付き添いですか。

樋口総長：ええ、付き添いなんです。特別養護老人ホームっていうのは、本来は病気が固定して治療を要さない人が入るということを文言に書いているんですが、それは法律的な文言であって、実際にはかなり重篤な方々が入ってくるんですね。で、1人、2人ぐらいのときには職員を回せたんですけども、4人、5人になるとですね、

職員を通院の付き添いに出せないんですね。それで困ってですね、県や、いろいろな関係機関とも相談したんですけども、なかなか解決ができなくて、私が当時の厚生省に直接乗り込んで、厚生大臣にも直接お目にかかってですね、これこれしかじかだということで話を陳情しました。で、陳情した結果、今からでも遅くはないから病院をつくれということになりましたね。病院をつくるというのは大変なことなんですけれども……。

——簡単に言いますねえ（笑）。

樋口総長：やっぱり行政っていうのはそういうものだと思いますね。しかし、一番の応援者はやっぱり群馬県ですね。当時、群馬県内には老人病院が一つもなかったんですね。それで群馬県はどうしても必要だということで、いろんな関係機関の問題がありましたけれども、意外と早く認可していただいたですね。

——では、順調にいった？

樋口総長：まあ、順調にいったというと、そうなりますか。

——そうなりますか（笑）。いろいろな問題があつてと、先ほど含んだようにおっしゃっていましたがものね。

樋口総長：ええ、いろいろな問題がありましたね。あまり具体的には言えませんが、まあ利害関係もありますしね、既得権もありますので、そういった壁というのは、今でもそうですけれども、いろんなところにはいろんな分野で大きな壁がありますね。その壁が高いか厚いか。その厚い壁をどうやってぶち破るかとか、高い壁を登るかっていうことなんですけど、まあ大変な思いをしました。

——その逆境の中、気持ちが折れそうになったり、諦めたいなと思ったことっていうのは、総長、なかったですか。

樋口総長：いや、ありましたよ。自分自身で判断してね、動いたわけだから、とん挫することも別に一つの方法なんですけど。

——やめるというのも一つの判断、決断ですよ。

樋口総長：そうなんです、判断ですね。でも、それはできないことだったと思うんですね。というのは、当時の特別養護老人ホーム、今でもそうなんですけれども、重篤な方々が来てですね、なかなか病院に入れられない方も

入ってきますし。ですから、そういった方々のことを目の当たりにすると、どんな壁があったとしても、それを乗り越えてやるのが社会のためになるかなと思いますね。

——さまざまな壁を乗り越えて病院を開業するわけなんですけれども、そうした中、今度は平成4年（1992年）に、旧子持村に介護福祉士を養成する専門学校を開校したそうですけれども、なぜ教育の分野に進出したんですか。

樋口総長：病院をつくったときにですね、やっぱり並行して一番の大きな問題は、医師の確保と看護師の確保なんです。ところがその当時の看護師っていうのは、准看護師が圧倒的に多かったですね。それで、昭和56年に高等看護学校をつくろうということで、厚生省のほうにも申請はしていたんですよ。

——ええ。

樋口総長：ところが、やっぱりそこにもまた厚い厚い壁がありましてですね、これがまた……。

——つくらせてもらえなかった？

樋口総長：そうなんです。それでやむを得ず、時期を待つしかないなということで。そこで介護をやったらどうかと思ったんですね、看護と両輪なのは介護ですから。昭和62年4月に老人介護研修センターということで群馬県から許可をいただきまして、始めたんですね。で、その延長線上に、今申し上げた介護福祉士の専門学校が平成4年にできるんですね。私の性格からすると、待つ性格じゃないんですけれども、やっぱりそこには、こういう時を待つというのも、ものすごく大切だなというのは思いましたね。

——タイミングってやっぱりありますものね。

樋口総長：うーん、ありますね。時間をかけることは、利用者の方々、あるいは利用者の家族だとか、行政だとか、見ているわけですよ。ですから、時っていうのは非常に難しいし、時を得れば、すごく背中を押してくれるんじゃないかなという感じがしますね。

——とは言いながら、かなりのスピード感できています。この後、大学を開設するわけなんですけれども、その様子を伺う前に1曲お届けしたいと思います。これは総長、よく歌う曲ですか。

樋口総長：そうですね。大好きな曲ですねえ。

——いしだあゆみさんのファンなんですか。

樋口総長：そうです、そうです。

——ああ、そうですか。それではお届けしましょう。

いしだあゆみで『ブルー・ライト・ヨコハマ』。



【シンガポールにて】

【大学の開設】

——専門学校を開校6年後の1998年に、いよいよ群馬パース大学の前身となる看護短期大学を高山村に開校しました。ただ、こう言うのは本当に失礼になるかもしれないんですけども、この場所というのが、かなり静かな場所、山の中ですよ。天文台の近くですよ。

樋口総長：そうなんです。はい。

——なぜこの立地を選んだんですか。

樋口総長：候補としてはいろんな場所があったんですけども、やはり先ほど申し上げたように、北毛地区には看護師が絶対的に少ないわけですね。ですから、利根・沼田・吾妻がいいだろうということで、利根郡と吾妻郡の境にある、この高山村に決めました。あと、決めた一番の大きな理由は、お金がないということですね（笑）。

——ああ、資金ですか。

樋口総長：資金ですね。大学をつくるとなるとですね、当時は看護短期大学なんですけれども、約2万4,000坪の土地が必要なんです。

——廣大ですね。

樋口総長：ええ。利便性が確かに悪いんですけども、

利便性の悪いところは逆に言えば土地代金はすごく安くできたんですね。キャンパスの面積と土地取得費の安さですかね、それで高山村に決めたというのが本音ですね。じゃあその利便性をいかにクリアするかということになりますとね、やっぱり学生寮をつくらうと。で、学生寮をつくれればですね、群馬県だけじゃなくて、結果的には北海道から南は沖縄までの学生が集まったんですね。寮もですね、安くしないとなかなか来てくれないだろうということで、3食付きで電気水道料とか全て入れたもので、月に5万6,000円という価格を出したんですね。

——破格ですねえ。

樋口総長：と思うんですね。で、その5万6,000円に、夏休みと春休みを抜いた10カ月を掛けると、年間56万円なんです。それと授業料を入れると、約200万円弱なんです。国立の看護大学とか県立の看護大学は、自宅から通えれば安いんですけども、やっぱりアパートを借りて看護大学に行くとなると、240~250万円かかるんですね。ですから、3食が付いて、生活費が56万円、授業料を入れて200万円弱の金額だと、これは必ず学生が集まるのではないかなと思っていました。結果、大変な数の学生さんが集まってきました。

——ねえ。ちょっとした発想の転換プラス、アイデアで、幾らでもそこに新たなニーズが生まれるという。

樋口総長：そう思いますね。確かに利便性は悪いんだけど、寮からキャンパスまでは歩いて数分ですからね、これは利便性がものすごくいいわけですね（笑）。

——いいですね（笑）。

樋口総長：まあこれも発想の転換かなあというふうに、自分で言い訳しているんですけどね（笑）。

——ところで、パース大学のパースというのは、どのような意味なんですか。

樋口総長：パースはポルトガル語で平和という意味なんです。ピースなんです。で、私はPAZの文字を基本理念にしようということで、Pのペーソン（Pessoa）は、人々とか、人類だとか。AはAssistantで、ラテン語ではアシステンシア（Assistencia）ということなんです。助言をすとか、お手伝いをすとか。Zはゼロ（Zelo）なんです。福祉とか、医療だとか、献身だとかという意味ですね。あるいは地域貢献だとかっていう意味なん

ですね。で、その3つの言葉の頭文字を合わせて平和と、
そういうことで名前を付けました。

——PAZ、パースというのは、そんな意味があるんですね。

樋口総長：はい。あるんです。

——教育に対する思いというのが、グッとここにも込められているんでしょうね。

樋口総長：そうですね。当初はパースというと、皆さん、旧文部省の方々、また私どもを応援する人や、職員の方々も、「パースは名前が軽いから駄目だ」って反対するんですよ。しかしこれは理念ですから、建学の精神にもつながるから、パースの名前は絶対に変えないということで、私は最初から最後まで押し通しました（笑）。

——押し通しましたか（笑）。で、その後、群馬パース大学は2005年に高崎市に移転して、四年制大学になりました。これは総長、どのようなお考えからだったんですか。

樋口総長：高山村につくった当時は、看護大学、短期大学は全国で63校しかなかったんですね。ところが、18歳人口も減少する中で、文系の大学がすごく定員割れをし始めた時期なんですね。その文系の大学の経営者の方々が、医療系に入ってくるんですね。で、その63校が、あれよ、あれよと増えたんですね。ものすごい勢いで増えて、10年もしないうちに約4倍強に増えたんですね。これを見ると、いかに我々が内容がよくても学生を集めるのが非常に難しくなるなあとということで、高山から高崎に移ろうということで、いろんな議論はありましたが、当時のお世話になった高山の方々、あるいは村長さん以下、皆さまにはご理解していただいて、高崎に進出したということですね。

——たった10年ですけど、ものすごいスピードで大学が増えたということで、要は時代の変化があるからこそ、あまりこだわりすぎず、ニーズに合わせてシフトしていくという柔軟性も大切ですね。

樋口総長：そうですね。ですから私どもも2万4,000坪にある高山キャンパスをただ移転するだけじゃなくて、移転後のキャンパスの活用を考えなくちゃいけませんから、今は日本語学校の学校法人に無償で使っています。

——あら、無償なんですか。

樋口総長：そうなんです。今は非常にうまく高山のキャンパスを使っているようですね、はい。

——確かに、ごそっと学生さんがいなくなってしまうと、こう、村全体も寂しくなってしまうから……。

樋口総長：そう、そうなんですね。

【健康で長生きできる世の中へ】

——自分だけが勝ちを取るのではなくて、「皆さんにとっていい環境を」ということを常に考えていらっしゃるわけですね。さて、大学も設立して、教育・医療・福祉という三本柱のグループになったわけですが、100年後の将来の構想も持っておられるそうですね。ずいぶん先まで見据えたお話なんですけれども、これは総長、どうしてそういった構想をつくろうとお考えになったんですか。

樋口総長：将来のことを10年、20年、30年、あるいは100年というのは、誰にもわからないことなんですね。わからないだけにある程度の道しるべというのはつくっておかないと、と考えています。まあ創設者ですから。未来永劫続いていくためには、こうなってほしいなというもの、夢を語って、具体的にどうやって資産を増やしていくか、いかに地域に貢献するかということを考えて、一つの事業というのは、国の政策もそうなんですけど、大体30年でかなり変わってくるんですね。で、30年から35年を1サイクルと考えると、どうしてもすぐに100年って出てきちゃうんですね。で、100年後どうしようかってことを考えて、2008年、平成20年3月に私が100年構想を打ち上げたんですね。こんな夢みたいな話と思うんですけど、ただ夢じゃなくて、具体的に資産、建物を例に挙げると、新しい建物をつくって、また作り直すっていうのは大体35年ぐらいなんですね。そうすると、どうしても100年必要ですから、100年構想ができてしまったということなんですね。今、考えている目標は、もうこれは近未来の話なんですけど、2021年4月には、今の5学科にプラスして、作業療法学科とか、語聴覚学科を開設したいと考えています。病院だけでなく、在宅での看取りだとか、在宅で元気に過ごしてもらうためには、どうしても作業療法士だとか、言語聴覚士、そして

理学療法士を合わせたリハビリテーションが必要ですから。そしてもう一つは、看護の領域と協力するですね、在宅でほとんどうまく対応できるのかなということも、100年構想の一部なんです。

——皆さんが、健康で長生きできるための将来像ということになりますか。

樋口総長：そういうことですね。

——まあ、それにしても本当にものすごいスピードでいろいろな事業に取り組んできたという印象なんですけれども、樋口総長ご自身ではどう思いますか。

樋口総長：周りの方々もよくそう言われるんですが、私自身はスピード感というものを全然考えていません。厚い壁とか、高い壁だとか、そういうものが出てくると、どうしても挑戦してやろうというのがありますから。

——いや、そのバイタリティーの源って、何ですか。

樋口総長：いや、自分自身でもわかりませんが、ただやはり与えられたものってというのは、誰もわからないわけですね。神様ぐらいしか知らないんでしょうけれども。でも一つ一つの目の前の問題が、5年後どうなるんだろうとか、今この決断は正しいんだろうかって、それは悩めますよね。ですから、悩みを一つ一つ消すことによって、結果として「スピード感があるね」って言われるんだと思うんですね。「失敗を認めたくない」というのが本音ですからね、やっぱり。

——失敗していないわけですからね（笑）。

樋口総長：どうなんですかね。



【ブドウ園の様子】

【趣味と今後の展開】

——さて、少し仕事を離れたお話も伺わせてください。お忙しい毎日だと思うんですけども、樋口総長、趣味や気分転換の方法など、お持ちですか。

樋口総長：まあ趣味らしいものはないんですね。キザな言い方かもしれないけど、仕事以外は何もないということですね。趣味らしきものは、8年の壁というんですけども……。

——8年の壁？

樋口総長：8年の壁ですかね。油絵が8年、硬式テニスが8年、生け花もそうですし、お茶も、茶道ですね、8年間ぐらいで大体卒業しちゃってですね、継続できないんです。今までいろんなことをやってきましたけれども、最終的に残ったのがジョギングでした。まあ、これは健康を維持するためのことで、21年続けているんです。一晩おきに4キロ走っています。それともう一つ、これも趣味とは思っていないのですが、趣味に近いので紹介させていただくと、曹洞宗のお寺さんで座禅をしています。これも8年を超えて継続してまして、今年の1月で31年目になります。

——ええ。こう座禅を組んで無の境地になるんですか。

樋口総長：いや、無の境地になりたいと思ってやっているんですけど、そこがなかなか人間ね、煩惱を解放することはできないですね。

——30年以上やっていたらしても？

樋口総長：やっても。

——ええっ（笑）。

樋口総長：ただ言えることは、般若心経は非常にうまくなったということですね。

——そうですか。

樋口総長：ですから和尚に頼まれて、和尚に代わって導師もするんですよ。

——ええっ？ 本当ですか（笑）。

樋口総長：そうなんですよ。

——これは意外な特技の一つのような気もいたしますね（笑）。

樋口総長：あともう一つは、この100年構想の中にも絡

んでくるんですが、旧小野上村、今は渋川と合併しましたが、この小野子地区でブドウ園をやっているんですね。毎週末にブドウの苗を植えたり、剪定をやっているんですけども、ある意味で趣味と実益を兼ねているのかなと。これは8年ぐらいじゃなくて相当長く続くかなと。これは趣味にしたいなというような感じがしますね。

——いや、趣味と言いながらも、トータルすると仕事が趣味という話なのかななんて、今、お話をあらためて聞いていて感じております。では、仕事の話に戻りますけれども、パースグループの今後の目標というと、どんなことが挙げられますか。

樋口総長：今のブドウの話は、趣味のところでは言いましたが、我々のパースグループは、今、医療と教育に加えて、絶対という言葉を使うぐらい、よくなると思う農業分野をやってみたいなと思っています。その一つの段階として、ブドウ、ワインづくりをしていこうと考えているんですね。

——で、やっぱりできたワインは、飲む、趣味で飲むとか。

樋口総長：もうワインは大好きなものですから。

——ああ、そうですか（笑）。

樋口総長：今後はマスカットベリーAとナイアガラというブドウを、3,000坪の土地に全部で1,200本植えます。つい最近まで私一人でやっていたんですが、とても1人じゃできませんので、1人の職員の方を入れてですね……。

——2人でやっていらっしゃる？

樋口総長：2人でやっています。

——うわ、すごい。

樋口総長：今は農業も人数が多ければいいというものじゃなくですね……。

——ああ、そうなんですね。

樋口総長：今の農業分野というのは、ご存じかもしれませんが、人工知能「AI」が入っているんですね。ですから、すごく人数が少なくても、何とか機械をうまく使いながらやっていこうということなんですね。

——ああ、気が付けば、最先端の農業を、ブドウ園をおつくりになっていると。

樋口総長：そういうことですね。だから、できればこれ

を大学で何とかモノにしていきたいなということで、農業分野にも範囲を広げていければいいかななんて思っています。

——新たな夢が広がっていきますよね。

樋口総長：そうです、はい。

【新規事業に挑戦する人や若者へのメッセージ】

——最後に、新しい事業に挑戦したいと考えている人や企業内で頑張っている若い人へのメッセージの意味も込めてお話しただけだと思いますが、新規事業に取り組む中で大切なことは、樋口総長、何だと思いますか。

樋口総長：自分自身がこうやりたいという目的意識っていうんですか、あるいは趣意書っていうんですかね、こういうことをつくるんだと、そういった目的をつくって、それを青写真にするということだと思っただけですね。それが結果的には、不安だとか、失敗だとか、怖さを乗り越える鍵になるのかなあとと思います。これは私自身がやってきた実体験ですから。やっぱり目的を、趣意書をつくって、それを青図にする。若い人たちにもそういったことを一番頑張ってもらいたいと思います。自信がつかますから。やっぱり自信を持つことが夢の実現につながるんだと思うんですね。失敗を恐れず自信を持つということは、すごく簡単なようだけれども、難しいと思います。普通は成功して自信がつくっていうんですが、私は逆に、先に自信を持つことで成功するんだと思っています。ですから、先ほど申し上げた、なぜつくるという目的を明確にして、その青図をつくるということにつながっていくかなと思いますね。

——自分自身、しっかりこう、「なぜ」ということを問いかけていくということが大切ですよ。迷ったときには原点に戻るではないですけども。

樋口総長：そういうことですね、はい。

——今日のトップインタビューは、パースグループの樋口建介総長にFM GUNMAのスタジオにお越しいただき、お話を伺いました。さあ、それではもう1曲、お届けいたしましょう。薬師丸ひろ子さんもお好きだそうですね。

樋口総長：そうなんです。大好きですね。

——大好き（笑）。

樋口総長：好きですねえ（笑）。

——どんなところがお好きですか。

樋口総長：あの声がね、まろやかかっていうんですかね、人を包み込むっていうのかな、そんな感じですね。

——そうですねえ。それではお届けしましょう。薬師丸ひろ子で、『Woman “Wの悲劇” より』。今日はどうもありがとうございました。

樋口総長：どうもありがとうございました。

保証協会からのお知らせ

「シルキー クレイン presents ガールズ創業カフェ in 高崎」について

——ここからは群馬県信用保証協会からのお知らせです。今回は、保証協会が開催する女性向け創業セミナーについて群馬県信用保証協会の「シルキー クレイン」のメンバーである櫻井さんと関口さんにお話を伺います。よろしくお祈いします。

櫻井主査・関口課員：よろしくお祈いします。

——保証協会が開催する女性向け創業セミナーですが、これまで3回開催して、「チャレンジ・ザ・ドリーム」の特別編として放送していますよね。櫻井さん、今回はどちらで開催するのですか。

櫻井主査：はい、「シルキー クレイン presents ガールズ創業カフェ」と題して、これまで富岡市、桐生市、前橋市のカフェで開催しました。今回は、高崎市のカフェで開催します。

——今回は、高崎市で開催するんですね。過去3回のセミナーは、私が進行役として携わっていて、とても好評ですね。毎回、とても盛り上がって、群馬の女性のパワーを感じます。関口さん、今回のセミナーの内容はどのようなものですか。

関口課員：はい、今回も例年同様、4部構成で開催します。第一部は、開催会場のカフェを経営している方と、音楽

教室を営む方の創業体験談を「創業トーク」として奈良アナウンサーを交えてお話しいたします。第二部は、専門家の先生による講義です。第三部・第四部は、音楽鑑賞や交流会を予定しています。

——内容が充実していて、今回も楽しいセミナーになりそうですね。櫻井さん、セミナー開催日やの開催場所はどうなっていますか。

櫻井主査：はい、10月27日の午後、JR高崎駅にほど近い、高崎市通町のニットカフェ「アブサラクリコ 高崎店」で開催します。また、今回も、女性限定のセミナーとなります。創業にご興味のある方、創業を希望する方、創業後間もない方であればご参加いただけます。学生さんでもオーケーです。

——これから事業を始めたいと考えていらっしゃる女性の方はぜひご参加いただければと思います。さて、関口さん、セミナーに参加したい方はどのように申し込めばよいですか。

関口課員：お申込書はセミナー開催案内のチラシの裏面に用意しています。お申込書に必要事項を記入して、Eメール、FAX、または郵送でお申し込みください。セミナー開催案内のチラシは、保証協会の窓口で用意するほか、ホームページにもアップいたします。なお、お申し込みの受付は9月1日から開始します。先着順の受付となり、定員に達した場合、受付を終了いたしますので、ご興味のある方はお早めにお申し込みください。

——9月1日受付スタートですね。人気のあるセミナーですから、参加したい方は、ぜひお早めにお申し込みください。このセミナーをきっかけに、事業を始められた方がいらっしゃると思います。櫻井さん、とても嬉しいですね。

櫻井主査：はい、このセミナーが参加していただいた皆さんの創業の契機となれうれしく思います。実際に創業を決意されたら、私たち「シルキー クレイン」が全力でサポートさせていただきます。

——今回もセミナーの様子は、この番組の特別編として放送する予定です。こちらもぜひお聴きください。櫻井さん、関口さん、今日はどうもありがとうございました。

櫻井主査・関口課員：ありがとうございました。

チャレンジ企業紹介コーナー

株式会社そうじの力

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」続いては訪問インタビューです。今回の訪問先は高崎市の株式会社そうじの力です。清掃会社のように思える名前ですが、実はコンサルティング会社で、掃除を通じて経営改革と人材育成を支援しています。小早祥一郎社長は51歳。大学卒業後、自動車メーカーに勤務していましたが、いつか独立するつもりでいたそうで、35歳でサラリーマンを辞めて独立の道を進み始めました。高崎市上小鳥町のそうじの力を訪問して、独立の様子など、夢への挑戦について伺ってきました。

——私は今、高崎市のそうじの力のオフィスに来ています。小早さん、どうぞよろしくお願ひします。

小早社長：よろしくお願ひします。



【収録風景：そうじの力 事務所にて】

——何人ぐらいで運営しているんですか。

小早社長：以前は5名いたのですが、2名ほど独立をしましてですね、現在は3名で運営をしています。

——そうじの力という社名で、清掃会社だと思われることはありませんか？

小早社長：そうですね、大体名刺交換して一発目は「あ、清掃会社ですね」というように言われますね。

——実際はコンサルティング会社で、「掃除で組織と人

を磨く日本で唯一の研修会社」をキャッチフレーズにしているそうですね。

小早社長：はい。

——具体的にはどのようなことを教えているんですか。

小早社長：そうですね、まず大前提として、心と体がつながっているということがあるんですね。要するに、場が乱れていると、心も乱れると。逆に言えば、場が整うとですね、心も整うというのがあります。ですから、場を整えることを通じて、人の心を整え、組織をよくしていこうという、それが大前提としてあります。

——で、実際に会社で頼まれたときなんですけれども、どのような手順で行っていくんですか。

小早社長：まず掃除を通じて組織風土を変えていくというのが、いったいどういうことなのかというのを簡単にレクチャーをした後に、もういきなり「じゃあやってみましょう」という形でやっていただきます。

——それはどの場所ですか。

小早社長：どの場所でもいいんですけれども、例えば一番わかりやすいのは、物がごちゃっと積まれて、もうパンパンになっているような、例えば倉庫みたいなのがあつたりすると、それを一遍全部出してみましよう。で、中身を確認しましょう。要らない物、使ってない物があれば捨てましようという形で、そういう実習をするんですね。で、1人でやらないでくださいという話をしていてですね、掃除って、1人でやると修業なんですけど、みんなでやると、ちょっと楽しいレクリエーションになるんです。

——レクリエーション、あ、ゲーム感覚でやる？

小早社長：そうですね。本当に1人で黙々とやるのも尊いんですけれども、チームやグループごとでやることで、何をどうするんだみたいな話し合いが生まれるわけですね。その話し合いってというのが、必ずいいコミュニケーションにつながってくるので、チームビルディングにも、すごく役に立つんですね。

——実際には、指導したことで何か企業に変化がありましたか。

小早社長：いろんな変化がありますけれども、わかりやすいところかというと、残業時間が減ったとかですね。それはどういうことかという、必要なものがどこにあるかわからないと、一生懸命探しますよね。で、その探す時間ってバカにならない。それが、どこに何があるかすぐわかるようになると、探す時間が減るので、残業時間が減りますとか。建設業や製造業だったり、そういう現場系の会社だと、事故が減るとか、けがが減るとか、それから生産性が上がるっていうのももちろんあります。あとは、特にこれは私どもの特徴だと思うんですけども、やはり人が育ちます。特に、若手の方とか、社歴の浅い方がですね、どんどん育って行って、リーダー的存在になってきます。それには理由がありまして、掃除って誰でもできますよね。要は経験とか、スキルがないとできないということはありませんから、そうすると、そういう若手とか、社歴の浅い人でも活躍の場があると。

——ああ、みんなに平等に活躍の場がある。

小早社長：そういう中で、やっぱり前向きな人は、どんどんその活躍の場を生かしていくんですね。で、どんどんリーダーシップを発揮していきける。そうすると、それにつられて、実務の上でも、どんどん上に上がっていきけるということですね。だからもう、皆さん、口をそろえて言っているのは、「人が育ってきた」「リーダーが育ってきた」ということなんですね。



【顧客先での指導の様子】

——現在はそんなユニークなコンサルをしている小早

さんなんですけれども、以前は自動車メーカーで働いていたそうですね。

小早社長：はい。車が好きで自動車メーカーに入ったんですけれども、全然車と関係のない仕事に配属されてしまっていてですね、人事に配属されて……。

——ああ、そうなんですか。

小早社長：かなりショックを受けて、そこで第一弾、「自分の将来、このままでいいかな」なんて思ったりしたんですね。その後、車の営業もしましたし、環境問題に取り組む企画部署もやったり、いろんな仕事をしまして、勤務地も転々としていたんですね。やっぱりその中で、ずっとこのまま大きな組織の中の歯車の一員でいいかなあっているのがすごくあってですね、いつか独立しようと、ずっと考えていました。

——そして、35歳でサラリーマンを辞めたと。

小早社長：はい。

——ご家族の反応はいかがでした？

小早社長：そうですね、よく聞かれるんですけど、妻は全く反対しませんでした。というのも、もう結婚する前、付き合っていたころから、「いや、おれはいつか独立するから」という話をしていまして、全く反対しなかったもので、それはもう、私にとっては一番の後押しになりましたね。

——これ、35歳というのは、何かきっかけがあったんですか。

小早社長：上司に「小早君、来年課長にするから」と言われたんですね。

——おおっ。

小早社長：で、「あ、これ、やばいな」と思って。

——え、やばい？

小早社長：課長になったら、これ、簡単に辞めるって言えないなと思ってですね、管理職になる前に辞めようと思って、お尻に火がついて辞めたんですね（笑）。

——安定より挑戦を選んだわけですね（笑）。

小早社長：そうですね（笑）。

——では、そのお辞めになったときというのは、実際

に何をやるっていうのは決めずに辞めてしまった？

小早社長：いや、一応ですね、整体師をしようと思って辞めたんですけども、いよいよ裸一貫になってみてよくよく考えてみると、なりたい自分でもないなということで、いきなり無職になってしまいました。

——あら、うん。

小早社長：そこから非常にいい出会いがありましてですね、茨城県の人生道場みたいなのがありまして、理念というものを教えている先生がいらしたので、そこに行っただけですね。そこで、「小早君、君はね、理念がないから、そうやってフラフラ迷うんだ」って先生に言われて、「ああ、そうですか。なるほど、そうですね」って言ってですね、自分も理念というものをつくって、で、その先生がいろんなところで研修プログラムみたいなのをやっていたものから、その先生にくっついて行って、アシスタント講師として、次のキャリアをスタートさせたんですね。ただ、理念というのはすごく大事なことではあるんですけど、実践に至る道筋が必要だなというふうに思っていました。そんなときに、また全然別な方との出会いがあって、その方が何げなく私に「小早君、掃除をするといいよ」って言ってくれたんですね。それから、無我夢中でトイレ掃除や周辺のごみ拾いとかを我流でやり始めたんですね。そうすると、自分自身が変わってきたなというような手応えがあってですね、「ああ、これは面白い」と、「これを一つテーマにして、事業をやってみるのは面白いな」ということで、やり始めたんですね。

——掃除というのをビジネスモデルのコンテンツとして思い付いた、ひらめいたということですね。でも、それをどうやって仕事に結び付けていったんですか。

小早社長：まず自分自身が、いろんな経営の勉強会に、受講生として出るんですね。そこで必ず受講生仲間というのができます。「実は自分は理念というものを勉強する研修をやっているんです」なんて話をすると、受講生仲間が「ああ、小早さん、面白そうだから、ちょっとうちでやってくれる？」なんて声をかけてくれたりとかっていうのがあったり、そういうところから少しずつ少しずつお客さんを広げて行って、そういう中で、「いや、実は今度、自分は掃除っていうものをテーマにして、組織を変えていくような仕事を始めたんだ」と言うと、それ

までのお客さんが「じゃあちょっとそれをうちでもやってよ」っていうのも出てきました。そこからの紹介だったり、何らかのつながりで、別のお客さんを紹介してくれたりっていうのもありましたから、じわじわじっくりとお客さんを見つけていくっていう方法です。それは基本的に今も変わってないですね。

——そしていよいよ2009年に41歳で会社を設立したわけなんですけれども、その当時というのは、お住まいはどこだったんですか。

小早社長：設立したときは、まあ既に高崎だったんですけど……。

——あ、そうなんですね。

小早社長：その前に、一応、個人事業で独立をしていたんですね。そのときは東京の練馬にいたんですけども、私はあまり大都会が好きじゃなくて、どこか地方都市に住みたいと思っていたんですね。で、そう思っていたときに、たまたま高崎に経営者の仲間が何人かいて、しゅっちゅう遊びに来てたんですね。で、「ああ、いいところだな」と、移住をして、この高崎の地で、今の株式会社そうじの力という法人を設立しました。

——10年がたちましたけれども、現在の手応えはいかがですか。

小早社長：最初はもう本当に低空飛行どころか、地を這うような状況が何年もあったんですけども、まあそこを乗り越えてですね、おかげさまで、じわじわ、じわじわ広がってきてまして、お客さんも増えてきています。

——5人のうちのお二人がもう独立なさったというお話なんですけれども、会社として考えると、戦力が落ちるのはどうですか。

小早社長：まあ、私が「独立しなさい」というふうに言っていますから。

——あ。最初から結構、独立ありきで皆さん、入っている？

小早社長：そうです、独立を奨励しているんですね。

——ああ、そうですか。

小早社長：というのは、うちの会社を大きくしてうんぬんというよりも、この取り組みをどんどん世の中に広げ

ていく。そのためにアドバイスができる人を育てていって、巣立たせていくっていうのが、自分の役割だと思っているんですね。

——最後に今後の目標をお聞かせください。

小早社長：やっぱり全国各地に広げていきたいですし、群馬でもですね、もっともっと広めていきたいなというふうに思っています。それと、8月の下旬にですね、私、初めて本を出します。

——ああ、そうですか。おめでとうございます。

小早社長：はい。ちょっとまだタイトルは決まってないんですけども、掃除を通じて組織風土を変えていくというテーマの本を出しますので、そちらも、もしよろしければ手に取っていただければと思います。

——はい。株式会社そうじの力、小早社長にお話を伺いました。ありがとうございました。

小早社長：ありがとうございました。

エピローグ

夢への挑戦をテーマに、明日へ向かって走っている人を応援する番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今日は、番組前半は、群馬パース大学などの運営を手がけるパースグループの樋口建介総長のトップインタビュー、そして後半は、高崎市の株式会社そうじの力の訪問インタビューをお送りしました。トップインタビューの様子はポッドキャスト配信も行っています。FM GUNMAホームページの「チャレンジ・ザ・ドリーム」のサイトをご覧ください。

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」この番組は「頑張るあなたを応援します！群馬県信用保証協会」の提供でお送りしました。ご案内役は、私、奈良のりえでした。

FM GUNMAと当協会の共同制作番組
チャレンジ・ザ・ドリーム
～群馬の明日をひらく～

【10月の放送のお知らせ】

令和元年10月3日（木）12:00～12:55

再放送 10月5日（土）8:00～8:55

ぜひお聞きください！